共生委員会ニュース

ともしび

2026 年度　第 1 号
2026 年 5 月
共生探究学習委員会



◎共生委員会ニュース「ともしび」とは

共生・探究学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。
高等部の3年間を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の諸問題について考えていきましょう。
この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声を皆さんへお届けします。
他の人の経験を共有し、深く考えるきっかけとして下さい。

スクールモットー「地の塩、世の光」

◎高等部の平和・共生教育

3 年間の流れ（25 年度）

修学旅行、毎日の礼拝、各教科の授業などで平和と共生について学び、『平和共生 LogBook』に足跡を残していきます。

1 年生《平和共生論文》テーマ選定

【聖書】伝道週間で共生について考える 【生物】妊娠中の遺伝学的検査について考える

【英語】Playing the Enemy（アパルトヘイト撤廃後の南アフリカラグビーW杯）

2年生《平和共生論文》調査・アウトライン作成・執筆

【聖書】伝道週間で共生について考える 【現代文総合Ⅰ】長崎の原爆に関する作品

【歴史総合】太平洋戦争、アウシュビッツ収容所、原爆の歴史、ベトナム戦争

【公共】日本国憲法第9条、核兵器 【英語】Irena Sendler の人生を通して

【物理】原子力と核兵器 【修学旅行】被爆の歴史、キリシタン弾圧の歴史

3年生《平和共生論文》完成･読み合い等

【聖書】伝道週間で共生について考える　【英語】共生に関するテーマ

◆その他

グローバルウィーク、礼拝、自主学習グループの活動（フィリピン、宮古、~~東ティモール~~ ➡ 一時休止）など

◎高等部の平和･共生の訪問プログラム

今年度予定されているプログラム

高等部では、異なる環境に暮らす人々と交流することを通じて、社会の課題や共生社会について考えるプログラムを用意しています。ぜひ参加してみてください。

Ⅰ．宮古訪問プログラム

2011 年の東日本大震災で被災した岩手県宮古市を訪問して、当時の被災した状況を見たり、防災への取り組みを学んだり、現地の方々と交流したりします。

訪問日程：8 月 5 日（水）～8 月 7 日（金）　2 泊 3 日
問合せ先：増田（地理歴史科）、髙橋（体育科）、吉成（国語科）

◎高等部のグローバルウィーク礼拝

春のグローバルフィーク礼拝

高等部では毎年、春と秋の 2 回、グローバルウィークという週があります。

5 月 18 日～22 日（21 日・木を除く）

これまで多くの生徒が高等部のホームステイや訪問プログラムに参加し、経験と学びを得てきました。この週は、生徒たちの礼拝のお話を通じて、全校生徒がその経験を共有する機会となります。高等部ならではの一週間、皆さんの視野を広げるチャンスと受け止めてみてはいかがでしょうか。

◎高等部の自主学習団体

CLASSROOM へのご招待

高等部で活動している生徒の自主学習団体です。Classroom から参加してください。

Ⅰ．　BLUE PECO × Philippines Project

クラスコード：＊＊＊＊＊

◎報告：フィリピン訪問プログラム

プログラム参加者の渡航記

「今、一番欲しいものは何ですか？」この問いに何と答えるでしょうか。



渡航３日目にオーロラ州というローカルな地域にある学校を訪問しました。学校は、カラフルな遊具と活気で溢れていました。チャイルドたちと一緒に遊んでいる間、端からこちらの様子をじーっと見て時に笑みをこぼしている子どもたちが気になり、センターの人に聞いたところ、彼らは支援チャイルドの審査に落ちてしまった次のチャイルド候補であることがわかりました。

持ってきたおもちゃでチャイルドと遊ぼうとしたときも彼らは傍にいたため、シャボン玉のやり方を見せると好奇心旺盛な顔で手に取り、シャボン玉をつくって嬉しそうにしていました。折り紙をやり始めると他の子どもたちも沢山集まり、みんなもう１枚、もう１枚と熱心に取り組んでくれました。段々と増える彼女たちの笑顔を見て、なぜか「嬉しい」よりも、「安心」の方が大きかったです。もしかしたら、心のどこかに「貧困地域の子どもたち＝笑顔が少ない」という勝手な偏見があったのかもしれないです。

キャンプファイヤーの時間になり、お互いダンスを披露した。ダンスの途中に一緒に遊んでいた子たちを呼んだら、笑顔で来て見様見真似で踊ってくれた。先生方が撮ってくださった動画を見返すと、みんなそれぞれ近くのチャイルドにダンスを教えながら踊っていて、温かい気持ちになりました。みんなで円になって回っていた時間は本当に幸せで、「この時間がいつまでも続いて欲しい」と思いました。

その後、渡航前から決めていた「今、一番欲しいものは何ですか？」という質問を周囲のチャイルドたちに投げかけました。英語では難しい回答もあったため、翻訳を使いながら話しました。「教育」と答えたチャイルドが最も多く、「円満な家族」が次いで多かったです。他にも「愛」や「インフラ整備」などもありました。ある１人の少女が急に「１ペソ恵んでくれることを望んでいる」と翻訳を通して言ってきました。正直お金を請求されるとは思わなかったため、戸惑いました。質問を投げかけると「日本から教科書を送ることは可能ですか」という答えが返ってきて、複雑な気持ちになりました。というのも、前日に行ったショッピングモールの本屋で、在庫処分のために１ペソで売られている大量の算数の教科書を目にしていたからです。この子達に届けられればいいのにと思ったが、運ぶ輸送費など含めると高くなってしまうのです。教科書以外でも文房具や衣類などに関しても同じことがいえます。ガソリン価格は、滞在中見るたび高くなっていました。また、「あなたがここに長く滞在することです。



私たちの州の美しさを楽しんで頂ければ幸いです。」という回答からは地元への誇りを感じることができて嬉しかったです。この質問からチャイルドたちの色々な状況が把握でき、渡航で得られた学びの軸となりました。

別れの時間が迫り、沢山のチャイルドたちがサインを求めにきてくれたり、モール

のお花をプレゼントしてくれました。一緒に遊んだチャイルドたちとは、バスに乗ってからずっと手を振り合っていました。会っていた時間は数時間だけでしたが、チャイルドたちと心から親しくなった気がして、別れが本当に辛かったです。出会ったチャイルドたちは、みんな優しく、話す内容、言葉に重みがありました。

また、マニラ都市圏で見た光景には心が大きく揺さぶられました。当たり前にトイレットペーパーがないトイレ、絡まっている電線、他にも沢山の衝撃的な貧困の現状が沢山ありました。現地へ行かないとわからない構造的な問題ばかりでした。

渡航前は、フィリピンというと毎朝食べるフィリピン産バナナが真っ先に思い浮かんでいました。しかし、渡航前の事前学習をはじめとする本プログラムでフィリピンが抱える数々の問題を知り、フィリピンを多角的に捉えるようになりました。特に、渡航後は母国のような存在となり、「フィリピンのために何ができるか？」と日々考えるようになりました。学ぶ意欲のあるチャイルドたちに出会ったことで、勉強や面倒な事から逃げてきた自分を本当に恥ずかしく思います。支援する側として、その国や地域のことをよく知ることは、とても重要なことであり、それによって正しい支援ができるのだと思います。これから、沢山の学びや幸せを与えてくれたチャイルドたちのためにも、自分の恵まれた環境の中でできる最大限のことをしていきたいです。

最後に、フィリピン訪問プログラムでは、自分と同じテーマに関心を持つ仲間たちに出会えて、本当に有意義な時間を過ごすことができました。渡航に行かせてくれた親、多くの学びへ導いてくださった先生方と初中高の渡航メンバー、そして本プログラムに携わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。

３年　M.M.

◎「山の手空襲を語り継ぐ集い」

山の手空襲を語り継ぐ一音楽と朗読の集いのご案内

1945 年 3 月 10 日未明、米軍は東京の下町地域を対象に大規模な空襲を行い、およそ 10 万人の死者を出した。続いて、5 月 24 日夜から 25 日にかけては、いわゆる「山の手空襲」が行われ、赤坂、麻布、青山、渋谷などが主な標的となった。25 日午後 10 時半ごろから約 2 時間にわたり、約 500 機の B-29 爆撃機が飛来し、焼夷弾約 3,200 トンおよび爆弾数トンを投下した。公式記録によれば、約 3,600 人が犠牲となった。焼夷弾の集中投下により広範囲で延焼が発生し、表参道交差点付近でも激しい火災が発生した。一部地域では火災が竜巻状に燃え広がる「火災旋風」と呼ばれる現象が生じ、多くの人々が避難の間もなく命を落とした。

戦後 60 年を経て、空襲の体験記集が編まれ、この地に「山の手空襲」を追悼する碑が建てられた。近年、空襲体験者や遺族、道行く人にも呼びかけて、献花が行われている。戦後 80 年となる今年も実施される。また、2016 年から始められた「山の手空襲を語り継ぐ集い」には高等部生徒会と放送部が司会と体験記の朗読を毎年担当している。

１．献花　2026 年 5 月 25 日（月）午後 1 時頃　表参道交差点の追悼碑前

２．集い「山の手空襲を語り継ぐ一音楽と朗読の集い」7 月 12 日（日）午後 1 時頃
　　会場　　：港区立青南小学校体育館　　問合せ先：増田（地理歴史科）